

# 道徳科における「構造的な板書作り」と「児童のワークシートの工夫」の実践

～板書と児童の学びの深さのつながりについての考察～

奈良県奈良市立帯解小学校

教諭 頃橋真也

## 1. 主題設定の理由

道徳が特別の教科となり、3年を迎えている。教科化当初は、授業の進め方や学習評価について不安もあったが、児童が興味を持ちそうな教材が盛りだくさんの教科書を見るとその不安も解消された。しかし、魅力ある教材を生かすのは教師の事前の授業の準備に他ならない。教科書会社の指導書には『発問例』『板書計画』も記載されているが、年間35時間を指導書通りにこなすだけでは、教師も児童もおさまりの授業スタイルに飽きてくるかもしれない。また、指導書にはワークシートも付属されているが、書く箇所が多く設定されているものもある。書くことに苦手意識を持っている児童にそのまま利用すると、辛い時間となることが予想される。つまり、道徳の授業をより魅力あるものにするには、指導書に頼りすぎない発問や板書の工夫や児童を考慮したワークシート作りが必要になる。

そこで本研究の目的は、教師の板書がより構造的になれば、児童の思考はより深まり、ワークシートに変化が表われるかについて考察する。同時に、児童の思考の手助けとなるワークシートのよりよい在り方について考えたい。

## 2. 研究の仮説

本研究をの仮説について述べる前に、道徳科における『板書』と『ワークシート』の役割についてはじめに明らかにする。

### ア. 道徳科における板書の役割とは

道徳科における板書について、小学校学習指導要領（平成29年告示）解説『特別の教科道徳』では、「板書は児童にとって思考を深める重要な手掛かりとなり、教師の伝えたい内容を示したり、学習の順序や構造を示したりするなど、多様な機能をもっている。板書の機能を生かすために重要なことは、思考の流れや順序を示すような順接的な板書だけでなく、教師が明確な意図をもって対比的、構造的に示したり、中心部分を浮き立たせたりするなどの工夫をすることが大切である。」

としている。つまり、板書の役割とは、児童の思考を深めるために活用していくものである。そのために、教師が明確な意図を持って望まなければ、児童の思考の深まりを得ることが難しいということに他ならない。また島（2017）は構造化された板書について、「「構造的な板書」とは、道徳的価値に関わって、整理された板書のことを言うのです。」としている。つまり、教師の明確なねらいのある授業のもと、児童の思考を構造化して表現することが板書の大きな役割であることが分かる。

### イ. 道徳科におけるワークシートの役割とは

道徳科における書く活動について、小学校学習指導要領（平成29年告示）解説『特別の教科道徳』では、「書く活動は、児童が自ら考えを深めたり、整理したりする機会として、重要な役割をもつ。この活動は必要な時間を確保することで、児童が自分自身とじっくりと向き合うことができる。また、学習の個別化を図り、児童の感じ方や考え方を捉え、個別指導を行う重要な機会にもなる。さらに、一冊のノートなどを活用することによって、児童の学習を継続的に深めていくことができ、児童の成長の記録として活用したり、評価に生かしたりすることもできる。」としている。つまり、ワークシートの役割とは、①考えを深め整理する②学習評価に活用していくことである。児童のワークシートを見れば、その児童がどのように思考したのかが分かり、教師は児童に個別に声掛けをし、支援することができる。また、授業の終末に振り返りを書く活動を取り入れれば、その時間での児童の学びを見取り、評価することができる。

### ウ. 仮説

構造化されていない、従来の板書でも児童の思考の補助にはなっていたと思われる。しかし、構造化された板書では、ワークシートに考えを書くことが苦手な児童でも、板書を見れば、友達の見解と比較・関連づけて、自分の考えをより表現できるようになると予測する。

### 3. 研究の計画

- 研究対象： 3年1組(28名)
- 抽出児童： 2名
- 研究期間： 2019年4月～2020年3月
- 板書： 従来型の板書  
(2019年4月～2019年7月)  
構造化された板書(2019年9月～)
- ワークシート： 45時間の授業で中心発問と終末に書く活動を入れる。

### 4. 研究の手立て

本研究では、従来型の板書と構造化された板書を期間を分けて実践する(図1)。従来型の板書とは、有松(2020)によると、「川流れ式板書は、黒板の右側から左側に向かって時系列に書くという以前より道德化の授業で多く取り入れられている基本的な板書構造です。(中略)川流れ式板書の基本は、場面絵を並べながら授業を進めることです。場面絵を時系列で右から左に配置すれば、細かい確認をしなくても、お話の内容を視覚的に理解させることができます。(中略)キーワードとなる登場人物のセリフを短冊に書き、適切に黒板に配置するのも有効な方法です。」としている。



図1 川流れ式板書

構造的な板書については、坂上(2019)が提唱している中心局面から道德の授業を作る方法について実践する(図2)。坂上(2019)によると、「教材の中の道德的価値が作用した中心局面を捉え、その場所に軸となる道德的価値を「心柱」として立て、多角的に議論する。また、多面的・重層的に捉えるための発問を課して、より深い学びを図っていくのである。」としている。

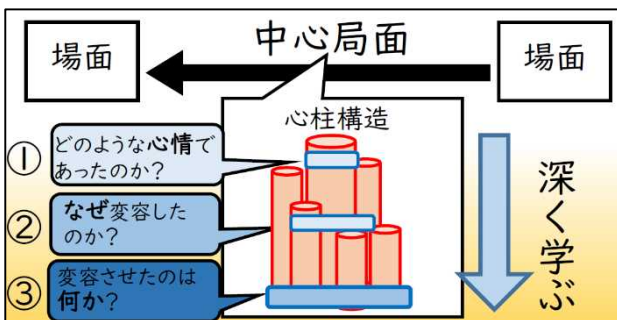


図2 中心局面を捉えた構造的な板書

また、坂上(2019)は、教材を3つの型似分類して捉える手法を提唱しているのも、そちらも実践することとした。坂上(2019)によると、「教材には「変化型」「停滞型」「拡散型」など多様なものがあり、どの場合も明確な分析をしておくことは、構造的な板書に不可欠な条件である。総じて言えば、児童の実態に応じた教材分析を行い、実態にふさわしい授業に仕立てていくことが肝要である。」としている。

ワークシートについては、児童の学習の様子を受け手、よりよい形を模索していくことにした。

### 5. 研究の実際

#### [1学期の取組]

川流れ式の板書で授業を実践し、そのうちの1時間の板書とワークシートを紹介する(図3)。

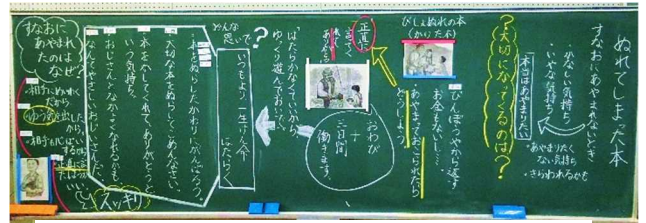


図3 めれてしまった本(光村図書 3年)の板書

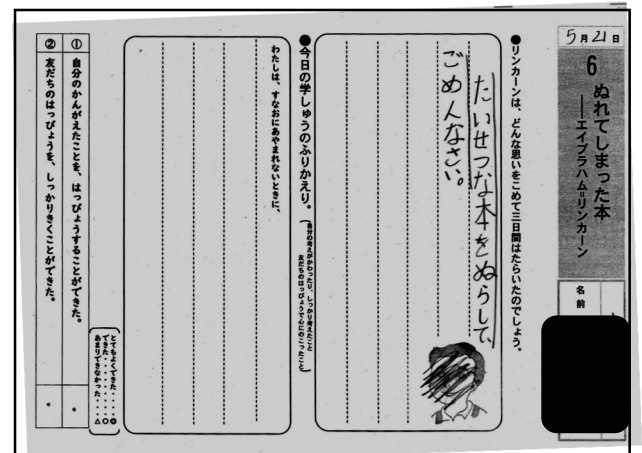


図4 ワークシート 5月(児童A)

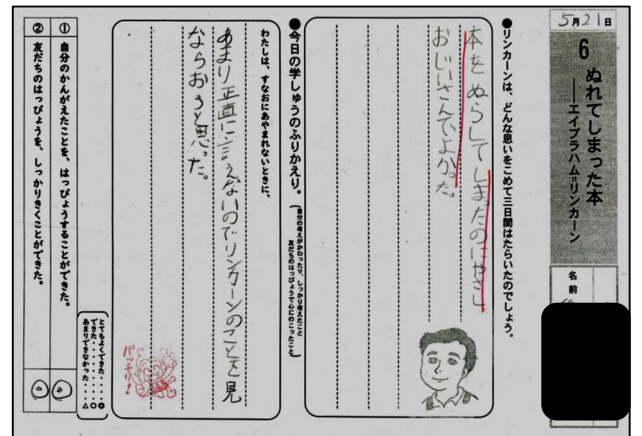


図5 ワークシート 5月(児童B)

児童 A は、学年当初、道徳の授業があまり好きではない様子が見られ、ペアやグループ交流では発言するが、全体交流での発言はなかった(図4)。

児童 B は、学習の成績がよく、本をよく読む児童である。発言は多くはないが、全体交流でも、価値に迫る意見を述べることもあった(図5)。

両者に共通しているのは、中心発問で、教材の登場人物の心情について考えることができている。しかし、学習の振り返りの欄では、自信を持って書くことができていないことが分かる。理由としては、児童のワークシートに書き出しの文字が書かれているからである。本学級では、ワークシートの片面には、振り返りの欄に、書き出しの言葉を書いたものにし、もう片面には、空白にしたものにし、児童が自由に選択して書けるようにしていた。これは、児童の学びの方法を個別最適化するためである。児童が振り返りを書くことにどのような困難さを持っているのか考えるために、児童の振り返りを分析した。すると、様々な視点から、振り返りを書いていることが分かった。例えば、自分の過去の経験を書いたり、教材の登場人物のことについて改めて書いたり、児童によって視点が異なっていた。これは、書ける児童にとっては問題ないが、書くことを苦手としている児童にとっては、視点が定まらず迷いが生じるのではと考えた。また、どのように自分の考えを文章化すればよいかについても困っているように感じた。そこで、以下の4つの視点『①お話について②友達のいけんについて③これまでの自分について④これからの自分について』を提示し、振り返りの型を提示した(図6)。書くことが苦手な児童には、そばに寄り添い、どの視点で書きたいか本人と話して、明確にするように支援した。

④これからの自分	③これまでの自分	②友だちの意見から	①お話から
わたしは、今日の学習で、「 ということについて学びました。だから、これからは、 思いました。」	わたしは、今日の学習で、「 ということについて学びました。わたしは、これまで、	わたしは、「○○さんの、 という意見が心にのこりました。理由は、 だから、わたしは、 だからです。」	今日のお話で、「 は、 は、

図6 振り返りの型(電子黒板で提示)

これまで、川流れ式の板書をする場合は、自分でA4の紙に、発問の流れを書き、板書計画などを作成してい

た。しかし、構造的な板書にするには、教材の中心局面を明らかにし、教材分析の仕方を従来と変更していく必要性を感じた。そこで、いつも初めに『ねらい』『中心発問』『主題名』の三つを考えていたが、さらに『板書計画』も同時に考えられるような教材分析シートを作ることにした(図7)。

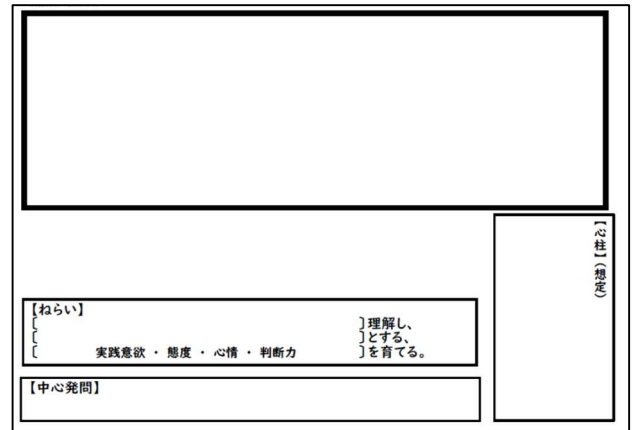


図7 教材分析シート

この教材分析シートは、実際の黒板の比率と同じ枠にし、そこに板書計画を書きながら、教材を分析して『ねらい』『中心発問』『主題』も同時に考えられるというものである。

〔2学期以降の取組〕

板書については、構造的な板書を意識して、毎時間15分程度教材分析シートに記入して授業に臨んだ。以下に、実践した板書を3つ紹介する(図8、図9、図10)。

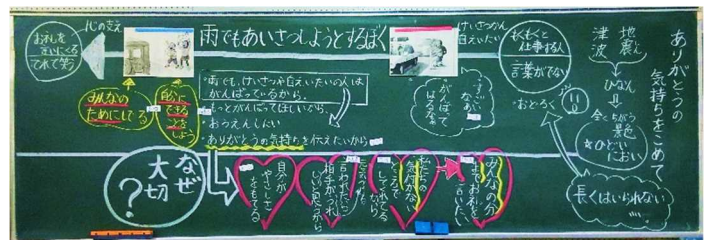


図8 ありがとうの気持ちをこめて(光村図書 3年)の板書[変化型]



図9 島ひき鬼(奈良県人権学習教材 3年)の板書[停滞型]

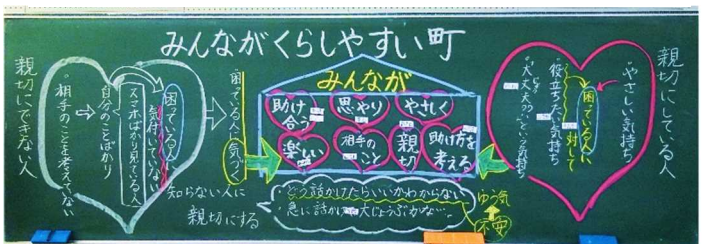


図10 みんながぐらしやすい町(光村図書 3年)の板書[拡散型]

本市採択の光村図書は、登場人物の心情が変化する『変化型』の教材が、最も多かった。話の登場人物の心情があまり変化しない『停滞型』の教材は、数は多くはなかった。発問としては、登場人物の心情を問う発問ではなく、人物の行動の理由や根拠を問う発問を多く利用した。多様性(感動等)のあることについて考えたり、登場人物の行動などから解決策を考えたりする『拡散型』の教材の数は少なかった。拡散型の板書の形は上記の二つの型以上に、授業の方法や板書構成の自由度が高く、丁寧な事前準備が必要であった。

児童のワークシートに関しては、下記のような変化が見られた。

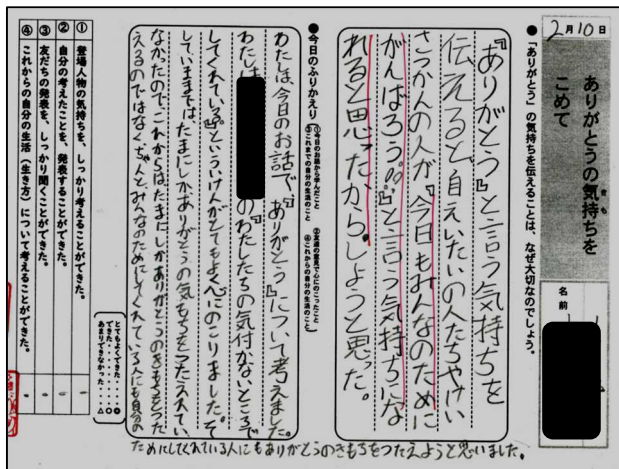


図11 ワークシート 2月(児童A)

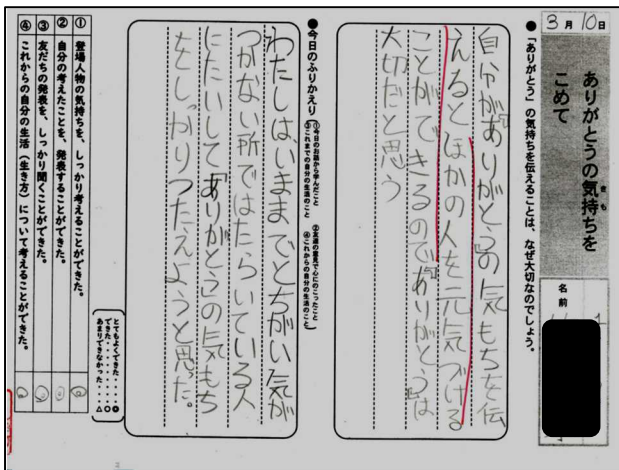


図12 ワークシート 2月(児童B)

児童Aの振り返りをみると、(図6)で提示した、型を利用しながら、書いていることが分かる。さらに、この児童Aに関しては、先ほど提示した、4つの視点の全てを繋げて文章にして書いている。児童Bに関しては、1学期と比較すると、ワークシートに大きな変化は見られなかった。

## 6. 研究の考察と今後の課題

本研究では、教師の板書と児童のワークシートの繋がりを調べるために、1学期と2学期以降の板書と児童のワークシートを比較し、検証を行った。結果としては、ワークシートの記入の仕方に大きな変化が見られた児童が大勢いた。児童Aは道徳の学びの振り返りを書くことを楽しんでいる様子が見られ、友達の見意を受けて、自分の考えを表現できる力が付いたことがワークシートからも明らかとなった。それは、児童A自身が45分の中に確かな学びがあったという証拠にほかならない。この変化要因として、児童の思考の軌跡が表された構造的な板書が大いに役立ったと思う。なぜなら、学習の振り返りを書く場面では、多くの児童がすぐに書き始めるのではなく、板書をしばらく眺めてから電子黒板(図6)見て、その時間の学習の振り返りを書いていたからである。これは、45分間のクラスの思考の結晶ともいえる板書をもとに、自分自身を振り返り、深い学びとなっていることが分かる。児童Bに関しては、ワークシートには大きな変化は見られなかったが、発問に対する答え方で、友達の見意と比較したり繋げたりして、主題やねらいに迫る見意を発表する機会が増えた。

このように、仮説の通り、構造的な板書を児童とともに作ることができれば、児童の思考は、他者との比較や繋がりを通して、より深いものになりワークシートに形として表れることが分かった。また、ワークシートにはっきりと形として表れない児童も、発言や授業中の態度からよりよい変化が感じられた。

しかし、構造的な板書やワークシートの工夫の仕方は、児童の発達段階や教材によって、さらに柔軟に変化させていく必要があることも感じた。今後の課題としては、より児童の思考を板書で表現するために、思考ツールをさらに活用して、見える化したり、発問そのものを充実させていったりすることが必要であると思う。教師が中心局面と思ひ、課題を立てて発問をしても、児童がそこを中心と思わなければ、児童の学びは受け身になってしまう。児童に道徳的な中心局面はどこかを考えるような問題解決的な学習課題の検討もしていく必要があるだろう。

「学習指導要領 特別の教科『道徳』」(2017)

「第55回全国小学校道徳研究大会 奈良大会冊子」 坂上良幸(2019)

島恒夫・吉永幸司(2017)みんなでつくる「考え、議論する道徳」小学館

有松浩司(2020)『道徳板書 スタンダード&アドバンス』明治図書